

川下の風景⑮

～人生は川の流れのように～

米津 達也

【ビジョン】

前号も我が子の身近な話から始めたが、もう一人、今年受験生の子がいる。これまであまり勉強に熱心ではなかったが、四月以降、いろいろ環境にも感化されたのだろう、猛烈に勉強に励んでいる。この酷暑の中、ひたすら自転車を漕いで塾に通い、夜半に帰ってくる。こういう時、田舎に暮らしていると可哀そうだなと思うが、当人はそんな田舎から抜け出たくて勉強に励んでいるのかも知れない。希望の大学に入り、さっさと下宿生活をしたいと目論んでいるようだが、自分の行く道を親にろくに相談もせず決めるだけの意思があるなら幸せなことだと思って養育義務をせっせと支払っている。

仕事では30代半ばの青年と面接をした。青年というには歳を行き過ぎているが、業界の特性上、まだまだ若手で通る年代だ。高校を卒業し、何となく就職先を選んだ。その後、親の勧めもあり、介護の仕事を選んだという。職場を転々とし、この歳になって同じ介護業界だが職種の異なる仕事を希望し、今回の面接に至った。最近の求職者はハローワークで求人票を捲らない。手元のスマートフォンで検索すれば、大手求人サイトが条件に見合った職場を仲介してくれる。無料という触れ込みだが、もちろん支払うのは求人側でその紹介料は馬鹿にならない。昨今、行き過ぎた仲介料に関しては規制の動きもあるが、どこも喉から手が出るほど欲しい働き手であるから焼け石に水だ。話は飛んだが、そんな求人サイトを見て応募してきた青年と面接をした。ジーパンにポロシャツ、髭も剃らずに入ってきた姿を見ると3分で切り上げたいと思った。平成元年生まれだと言う彼と話をすること30分。子供の頃の夢を聞いてみた。ちゃんとやりたいことがあったらしいが、それを親に相談すると反対されて、おずおずと引き下がって今に至らしい。別に今からでも遅くない、やってみたら、と声を掛けるがその気はないようだ。介護業界に骨を埋めると覚悟したなら、年齢からしてもそんなにチャンスは多くない。5年後の自分、10年後の自分はどうなっていると思うか。これも毎回面接で聞く質問だが、大方しっかりとしたビジョンが語られることは少ない。面接の時はスーツを着るんだよ、と周囲の大人は教えてこなかったんだろうか。そう思と、社会や親の責任を思う。この場限りの面接、おそらく二度と会うことは無いから別に気にすることも無いが、5年後、10年後のビジョンは視ておく方が良いと思っている。社会は、介護業界は大きく変化する。

【草加市視察】

埼玉県草加市と言えば、やっぱり煎餅だよな、と思っていたが、物産店に行くと今は革製品の街だそう。煎餅職人の数は少なくなる一方で、革加工職人の数は増加している。『翔んで埼玉』という映画の印象もあるのか、地味で東京都心のベッドタウンという印象だが、初めて草加市を訪れた私からすれば随分住みやすそうだし、

私が暮らす生活圏に雰囲気も似ていて親近感もある。私の暮らす地域を通る東海道、中山道。草加市を通る日光街道。街道文化の違いなども感じながら、本来の目的である視察研修の会場を訪ねた。

今回の視察研修のテーマは「共生型サービス」。介護と障害、互いに制度上相乗りしているサービス。制度発足は2019年度介護報酬改定だが、

全国的にもあまり普及しているとは言い難い。対象が異なるケアに心理的な障壁があるようだ。今回視察した事業所は、昨今、業界ではそこそこ有名なコンサルが携わっている。会場は20人弱。参加者名簿を見て笑った。ほぼ、地方の田舎法人ばかり。もちろん、自分たちのことも含めてだ。理由は推察できる。次の介護ビジネスの展開をどうするか。そのヒントがこれにあると踏んだのだろう。視察研修の触れ込みもそういう類のものだから、それを指南してくれるコンサルは救世主になると信じている。

一通り視察研修を終えて思ったことは、主流になり得ないビジネスを掘り起こして、それをコンサルビジネスのネタにしようとするシステムなのだと別の発見があった。つまり、介護業界自体が社会保障財政的にも、人材確保困難な状況が更に加速する観点からも、全体的に縮小傾向にあるわけだが、そこにあの手この手で隙間ビジネスを考える人は多いわけで、それがビジネスモデルとして成立する業界体質にも辟易としている。つまり自分たちで歩む道を、自分たちで決めることも実現することも出来なくなっている。冒頭の青年と同様、5年後10年後のビジョンを描く力が無いと、今後の変化に対応できなくなる。

【答え合わせが必要だ】

話はヒマラヤに飛ぶ。世界第2位の高峰K2(8611m)で世界的クライマーである日本人二人が滑落、安否不明のままとなった。未登攀の西壁ルート、7500m付近からの滑落。挑戦したひとり、平出和也の言葉を眼にした。

「未知なる世界だからこそ自らの目を見て、手で触れながら答え合わせをする」

彼は未踏ルートの岩肌や雪の事を言ったのだ

ろうが、人生もまた同じであると語っているのかも知れない。答えの視えた人生など無く、我々は常に手探りで突き進むと共に、その先のルートが進めるのか、撤退を余儀なくされるのかを読み解いていかなければならない。

眼前のクライアントは語る。60歳で自分の人生は終いでいいと思っていた。だから55歳で早期退職し、残された5年で周辺整理をするつもりだった。思いがけず大病を患い、そして運の良し悪しがわからぬまま現代医学に生命を救われ、60歳で終いと思っていた人生を75歳まで生きるに至った。そこに悔いがあるわけでもなく、ただ生かされている人生に感謝している。彼は妻を40代で亡くし、二人の子どもを育ててきた。60歳で終いと思ったのは、早くに逝った妻への思いからなのか。ただ、そこに人生に対する諦めの所作は見られない。大病の後遺症もあり、自由に歩くことは出来ないが、車椅子を器用に使って、ひとりで暮らすには大きすぎる田舎の母屋で日々読書に耽り、クラシック音楽などを聴き、時に昔馴染みの友人と食事に出かけ、親しい友人に誘われて月に1度は映画館に足を運んだりもする。人徳に恵まれた生き方がどのようなものであったか、三か月に1度の面談で小一時間ばかり人生談を聞くのは楽しみにしている。

機会があれば問うてみようと思う。自らの人生の答え合わせの結果を。本人が余分と語った15年の時間はどのようなものであったか。果たして、思い描くルートの先に頂上があったのか。教わることも多いこの仕事の価値として。

2024.8.25 米津達也